

## シュタイナー幼児教育に着目した保育者養成の試みから

末次 絵里子\*

### Training of childcare workers based on Steiner's educational principles for infants

Eriko SUETSUGU

Children absorb many factors from the surrounding environment through all of their sensory organs. Based on this, we focused on Steiner's educational principles for infants, which promote education of children by preparing good models that are used to protect children from their environment. Children learn various actions and behaviors by mimicking those of adults, and this affects digestion of information and development of organs at a deep conscious level. Childcare workers should prepare an appropriate environment for children based on conditions that promote mental growth/development of individual children. For training of such childcare workers, we provided students with various experiential exercises, such as doll making as handwork practice, visits and practical work at a Steiner kindergarten, and opportunities to communicate with children and their parents in parenting support. As a result, the students deepened their understanding of the importance of environment for child growth and use of handcrafted dolls.

Key word : シュタイナー教育 Steiner's educational principles、感覚器官 sensory organ、  
幼児 infant

#### 1. 研究の目的

シュタイナーは、「子どもは全身が感覚器官である」、「脳は感覚を通してそれ自体を形成し、その働きを高めるようになる」として、人生の始まりの時期に、様々な感覚器を育てていくことが、何よりも子どもの中の能力を育てていくと説明した。つまり、人間は感覚器を通して周りの世界と出会うと同時に、自分自身とも出会うため、感覚器は世界と自分をつなげる架け橋になるという考え方である。しかし、最近では、電子機器などが以前にも増して幼い子どもの過ごす環境の中に浸

透してしまっており、機械からの強烈な刺激によって、出来上がったイメージが押しつけられるという危険に幼い子どもたちはさらされている。それは視覚偏重ともなり、様々な感覚器官がじわじわと外に開いていく過程を阻害するものとなる。

そこで、本研究では、子どもたちは、自分を取り巻いている環境を、全感覚を通して体内に吸収していくということを踏まえ、現代の環境から幼い子どもたちを守り、真似をしてもよいモデルを用意することを第一義に掲げて教育を実践するシュタイナー幼児教育に注目した。そして、シュ

\* 広島文化学園短期大学保育学科

タイナー幼児教育の一端に触れることを通して、保育者の養成の一環として、学生たちが子どもの心を豊かに育んでいく上で大切なことを考える活動と検討をする機会を取り入れることとした。保育者として、子どもの内的な育ちに十分目を向けると共に、子どもの内的な育ちの本質を理解し、そのための環境をどう整えていくことが大切であるのかを考える力を持つことは、保護者への支援においても欠かすことはできないと考える。

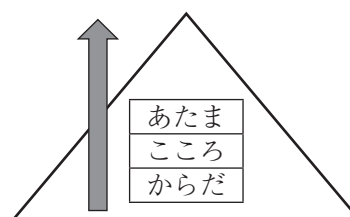


図1 7年ごとの成長の順序  
「からだ」⇒「こころ」⇒「あたま」

## 2. シュタイナー教育についての理論的背景

シュタイナー教育とは、ルドルフ・シュタイナーが提示した人間学と心理学に基づいて実践されている教育のことである。シュタイナー教育についての理論の中でも、特に、基本的な理論である7年周期の考え方を整理した上で、幼児期に当たる第一7年期に着目する。さらに、感覚器についての理論から、感覚と脳形成について焦点を当て、子どもの触れるおもちゃに関する考え方について整理する。

### (1) 7年周期の考え方と、幼児期に当たる第一7年期について

シュタイナーは、人の一生を7年周期でとらえ、それぞれの周期に成長課題があるとした。表1に、教育の対象年齢として21歳までの7年ごとの成長について整理した。からだとこころとあたまがバランスよく働き合ってこそ、人間の真の成長、生きる力の育ちにつながると考えられている。

表1 シュタイナー教育における7年ごとの成長

第一	7年期……誕生から7歳まで〈歯の生え変わり〉
からだ	一日々の生活や自由な空間で存分に遊ぶことを通して、自分自身の器となるからだを作る。—意志を育てる
第二	7年期……7歳から14歳まで〈第一次性徴〉
こころ	一学びを通して、外なる世界の美しさや不思議さや出会い、驚いたり感動したりすることによって、心が育まれる。—感情を育てる
第三	7年期……14歳から21歳まで〈成人〉
あたま	一世界との関わりの中で、自分がその一員であることを理解し、この世界とどのように関わるかを見出そうとする—思考を育てる

表1に示したように、シュタイナー教育においては、子どもはこの世に生を受け、最初の7年間は肉体の形成に、次の7年間は意志や感情を育むことに専念し、3番目の7年間になって、ようやく思考を成長させる、という考え方を基盤としている。まず「からだ」、次に「こころ」、最後に「あたま」の形成に進むという順序を意識することも大切である。この順序性を示したものが図1である。人間の課題にとって、最初の7年間はどのような意味を持つのだろうか。

#### 1) 誕生から3歳くらいの時期

赤ちゃんの一日一日は、徐々に肉体に生命の力を流し入れていく日々である。だんだん目を見開いて周りを見るようになり、あたかも声や音を聞いているかのように耳を澄ましはじめ、やがて身体を起こして関心のある方向に顔を向けるようになる。生命の力によって身体の器官が働き始めたのである。見えるようになった目、聞こえるようになった耳などから入ってくるものは全て、生命の力の中に流れ込み、新たな器官を形成する糧となっていく。

見るための器官、味わうための器官などあらゆる器官の形成のために生命の力が働いているため、その力が外側には働きにくく、外から入ってくるものは、内部に取り入れる方向にこそ作用していくと考えられる。

#### 2) 3歳前後の時期

「イヤ」、「ボクが（やる）」などの主張をし始める時期である。それまで、周りから入ってくる事柄を受けて、感覚器官を形成していた力は、さらに、形成された器官の働きを脳に結び付け、脳は各器官で受け取った刺激をもとにその子どもの脳を形成する。そして、基本的な感覚器官と脳との相互作用がある程度完成すると、今まで感覚器官から脳への一方通行であった働きが、逆に脳から

各器官へと方向転換できるようになり、感覚器官と脳との相互作用が生まれる。3歳頃の子どもが見せる反抗期とも取れる反応は、お母さんの腕の中で静かに眠っていた赤ちゃんが、立って動けるようになり、たどたどしい足取りで動き回るようになったのと同じように、頭の奥で静かに何もかも受け取っていただけの脳が、いつの間にか自ら活動できるようになり、自分の考えを持つようになった証でもある。

シュタイナーの人間観では、これを、人間に思考の芽が芽生えた瞬間である、と捉えている。しかし、この思考はたどたどしい足取りと同様に、目的もなく好奇心に駆られ、周囲の刺激に振り回されて動いていくので、歩き回る子どもをあたたく見守り、手助けしてあげる必要がある。

シュタイナー教育は「自由への教育」とうたわれ、自由の核となる自我の育ちを大切にする。どの子どももその自我を精神の中に持って生まれてくるが、育て方や教育によって、埋もれてしまったままその働きをすることができなくなってしまったり、弱々しい現れ方しかできずに感情や欲望に振り回されたりする人生を送らざるを得ないというようなこともある。子どもが最初に見せてくれるこうした思考の芽としての抵抗には、この自我が深くかかわっている。自分の力で生きたいという小さな自立心を、思考という働きを通して我々に見せている。こうした意味で、幼児が見せる抵抗は、自我存在の確認にもなり、順調に育っているということの証拠でもある。

### 3) 4～5歳の時期

思考の芽生えに伴う自我の誕生を経て、子どもは4～5歳になると感覚を全開して外の世界を積極的に受け入れ、より繊細で高度な肉体形成に専念する。それまでは、自然や事物の印象を吸い込むように受け取っていた感覚が、外の変化や変容、動きにも対応できるようになり、そこから新たな思考の発達も見られるようになる。友達を求め、一緒に遊ぶ面白さを感じ始めるのもこの頃であり、自分のイメージを構築しながら遊べるようになる。自分と他者との区別もつき、人に思いやりを持って接したり、助けたりすることも、適切な手助けと見本があればできるようになる。

友達と関わることは子どもに複雑な対応能力を育てることになる。事柄の中に同じ面白さを見つ

けて一緒に笑い合うという経験は、信頼という脳の働きを産み出すと共に、自分の行動に対して他者が示す表情を見たり言葉を聞いたりすることで、相手が自分をどう受け入れてくれたのかを見分ける力を作ることになる。心の動きとみなされやすいこのような事柄は、吸い込んだ印象を映し返そうとする脳の働きによるものである。シュタイナーが「脳は感覚を通してそれ自体を形成し、その働きを高めるようになる」と示す所以である。

### 4) 7歳くらいまでの時期

5～6歳になると子どもの肉体形成は次第に完成へと近づく。細かい作業や複雑な動きが必要に応じてできるのは、器官が形成されただけではなく、それが脳の命令にしたがって自由に働き、その働きで得たことをまた脳の形成に作用していくという高度な経路が肉体に形成されたためである。自分の肉体がどんどん自由になっていくのは、子どもにとって、内側から湧き出てくる喜びとなる。そこで、子どもは様々なことに意欲的に手を出す。しかし、その様子を見て周りの大人は、先に先にと（例えば、早期教育の教室やスポーツ教室などに通わせる等）大人の考えで急がせてしまうことは、機が熟すことを阻害する危険性がある。子どもの機が熟すこと、子どもが自分の力で脱皮することを、周囲の大人はじっくりと待つことが大切である。

子どもの肉体形成の機が熟す時期、脱皮の時期は、歯が抜け替わる頃だとされる。生命力は感覚を通して入ってきたものに依じた器官形成をなし、その器官が子どもの思い通り巧みに働き、行為として外に出て行くという肉体のすべての過程に関与している。その生命力は最も硬い組織である歯を押し出す仕事を最後に、肉体形成から去っていく。

### (2) 感覚器についての理論と、感覚と脳形成への着目から

シュタイナーは、「子どもの感覚器官を育むことがとても大切である」とし、12の感覚器を示した(表2)。赤ちゃんの場合には、これらの器官がすべて外に向かって開いていて、身体全体が感覚器であり、身体全体で見て、身体全体で聴いて、身体全体で味を感じるのだとする。通常は見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触る、などの五感が人の感覚器官だと言われるが、シュタイナーは自身の研

究から表2に示す12もの感覚器官があるとして、人生の始まりの時期に、様々な感覚器を育んでいくことが、何よりも子どもの能力を育んでいく、ということを提示した。

12の感覚器は、身体に密接につながった身体感覚器として、平衡感覚、自己運動感覚、生命感覚、触覚の4つ、感情に結びついた感情感覚器として、熱感覚、視覚、味覚、嗅覚の4つ、人間の精神活動とつながった精神感覚器として、自我感覚、思考感覚、言語感覚、聴覚の4つがあると整理されている(表2)。

そして、これらの育ちには順序があり、まず自分の身体に向けられる感覚とも言える身体感覚器が育ち、次に社会とのかかわり合いの上に立つ感覚としての感情感覚器が育つ。最後に、心の内面にかかわる感覚としての精神感覚器が育つとされる。この順序性を整理したものが図2である。

表2 シュタイナーによる、12の感覚器

人間の精神活動とつながった精神感覚器			
自我感覚	思考感覚	言語感覚	聴覚
感情に結びついた感情感覚器			
熱感覚	視覚	味覚	嗅覚
身体に密接につながった身体感覚器			
平衡感覚	自己運動感覚	生命感覚	触覚

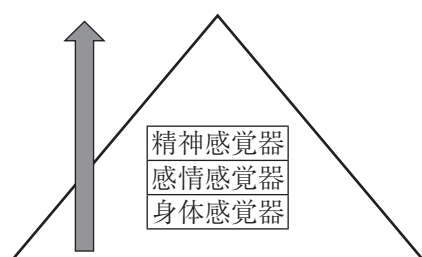


図2 感覚器の育ちの順序性

既に述べたように、シュタイナーは、乳児期は全身が感覚器官のようなものであるとして、それを「さざ波、反響、響き」という表現で示している。すなわち、何かの刺激を受けるとそれが波のように身体中に運ばれていき、それがすべてに影響を与え、身体中で反応するということである。例えば小さな音にも身体中で反応し、その刺激は身体中に行き渡る。そのため、乳児が身体内に取り入れる印象は生命エネルギーに影響を及ぼし、

肉体の発達や、血液の流れ、消化システムなど、肉体がリズムカルに機能する能力にもかかわってくる。

はじめの7年間、特に乳児にとって、環境は大きな影響力を及ぼすために、細心の注意と配慮が必要なのである。これを受けてシュタイナー幼児教育においては、感覚器官の育ちを大切にとらえて環境が丁寧に構成されている。ここでは、感覚器官の育ちを踏まえた上で、自然の素材の活用に関してや、おもちゃについて、そしてシュタイナー教育における人形の意義などについて取り上げ、整理する。

### 1) 自然の素材による多様な感覚と脳形成

シュタイナー幼稚園では、木切れやどんぐりなどの自然の素材が、おもちゃとしてたくさん置いてある。自然の素材は、たった一つの木切れでも、どこを持ったか、どこに触れたかによって、得られる感覚が異なるし、木の種類によっても違う触覚が得られる。幼児の感覚は大人よりもはるかに敏感なので、1つの木切れを持っただけでも、大人からは想像もつかないくらいの多様な感覚を受け取る。

幼児期の脳形成は感覚を通してなされる。子どもはいろいろな物に触れながら、暖かさや冷たさ、堅さや柔らかさ、ざらざら感やつるつる感、匂いといった感覚を受け取り、そうした感覚を全て脳に送り込む。そうした感覚を経験として送り込まれて形成された脳が、その後の子どもの成長に伴って、具体的につながりながら使われていく。つまり、自然の素材から得られる多様な感覚は、柔軟な脳形成の源になっているのである。このようなことから、自然の素材の、微妙で多様な感覚刺激が、幼児にとっては重要だと言える。

### 2) 幼児期早期のおもちゃについて

3歳頃までの幼児期早期の子どもは、自分と自分以外の外の世界がはっきりと区別されていないため、いわゆる「おもちゃ」は必要ないとされる。芝生の上でハイハイしたり、とことこ歩いていて葉っぱを見たり、木につかまったり、石ころを拾うなどして様々な物を手にする。そうした動きそのものが「おもちゃ」となるのである。つまり、子ども自身がなんでも「おもちゃ」になってしまう。何か特別な物を与えるのではなく、可能な限り、自然な環境の下に連れ出してあげるの方が大



切なのである。

そして、そこで見つけた木切れや木の実といった自然のものを家に持って帰って、かごに入れて置いてあげれば、それで十分「おもちゃ」になる。もちろん、尖っていたり、角張っていたりするような危ないものではなく、丸みのある、あたたかみのある、感触のいいものが与えられなければならない。

家の中で注意しなければいけないことは、おもちゃをどうするかということよりも、テレビやゲーム機、パソコン、タブレットなどの様々な電化製品から、電子音などの余計な騒音を出さないようにしてあげることである。子どもは、風の音や、水の流れる音のような、かすかな優しい音を受け入れる。そのようなかすかな感覚で子どもの脳は形成されていくので、本当に静かな音を聞かせてあげる、あるいは親が歌を歌ってあげる方が、ピアノやバイオリンの音を流すよりもずっと大切なことである。なによりも、ゆったりとした環境の中で親が子どもをしっかりと包んであげることが重要なのである。

このような生活が基本的に守られた上で、3歳くらいから、徐々に何かを叩いて音がすると、「ここから音が出たのかな？」と、客観的に物が見られるようになり、初めて遊具や玩具が意味を持つようになってくる、「物としてのおもちゃ」は少しずつその意義が増してくるのである。

### 3) 子どもの創造力を育む素朴な人形

シュタイナー幼稚園には、素朴な人形が多くある。ヴァルドルフ人形と呼ばれるこの人形は、簡単な眼を入れたりすることはあるが、特に表情はなく、具体的な形態も持たないことが多い。3歳以前の小さい子どもの場合には、人形としての形がほとんどなくてもよい。2,3歳の子どもは、布を触るだけでも、頭にちょっと触るだけでもいいので、手足は必要ないとされる。具体的な手足をつけるのは、子どもが少し育って、ヴァルドルフ人形を自分の友達にできる段階になってからである。

幼児が物を見る時は、見ている物すべてに意識を向けているわけではない。たとえば一本の木がある時、その葉っぱ一枚一枚の形態にまで意識を向けているのではなく、何かすごいものがある、というくらいに受け取っている。同じように、人

形を見る時も、この目はどういう目をしているか、を見るのではなく、全体として「抱えている嬉しさ」を感じている。それなのに、妙に主張のある目がついていたりすると、子どもにとっては、自分と一体化できる存在ではなくなってしまう。人形自体が個性的でないことが大切で、そこに個性を入れていくのは子どもの持つ想像力なのである。

子どもはできるだけ無個性なものに向かった時に、自分なりの想像力を加味して、新たな個性を加えていく。そこに子どもの想像、自由になった脳から作用する想像の能力が培われていくので、目鼻や表情をすべてつけてしまったら、できあがったものだけを受け入れて、想像力を全く育てないまま成長していくことになる。具体的な目や鼻を作り込んでしまえばしまうほど、子どもを一つのパターンの中にはめてしまうことになる。想像を限定するプラスチックのブロックのようなものでは、パターン化された思考しかできなくなってしまう。遊びそのものがパターン化されて、自分自身の力で想像しなくてすんでしまうために、子どもが育たなくなるのである。

子どもがものに向かう時には、いつも自分が想像力を加える、恣意的なものを入れるのは自分だという訓練をしていけば、常に自分の中で想像力を培っていく練習がなされて、ものを産み出す能力を持つ脳をつくることになる。大人の恣意的な働きをできるだけ入れないようにする、恣意的なものを入れるのは子どもの想像力である、というのがシュタイナー教育の考え方である。

### 4) 子どもの目の前で作ることの意義

ヴァルドルフ人形は、保育者が子どもたちの目の前で作ることを基本としている。保育室の棚には常に綿や布や裁縫箱が入れてあり、作ろうと思った時に素材を机の上に持って来て作る。保育者は作りながら子どもを見て、子どもたちは、自分もやりたければ保育者の傍に来て一緒に真似をするし、他の遊びをしたい子どもは自分の遊びたいように遊ぶ。子どもたちは保育者が心を込めてお人形を作っている姿を目の前で見ているし、出来上がっていく過程を知っている。このように、過程を全て見ていることも大切だとされている。作る過程も含めてこそヴァルドルフ人形なのであり、シュタイナー幼児教育の一環であると言える。

### 5) 他者とのかかわりと人形の役割

3歳くらいになった子どもは、二人で一緒に遊んでいるように見えても、誰かが傍にいる場所が好きなだけであって、お互いはいのかかわりも持たずに遊んでいることがよくある。「自分」を自覚し始めたばかりの子どもが、隣にいるもう一人別の「自分」を自覚し始めた他者とつきあうには、まだ難しすぎる面がある。

そうした時期の子どもにとって、もう一人の「ぼく」、もう一人の「わたし」となるのがヴァルドルフ人形である。連れていく「ぼく・わたし(=人形)」は、自分と同じ人間であり、最初に見えるお友達である。人形のお友達を大事にすることで、そのお友達をはさんでつくった人間関係から、人間対人間の交友関係ができてくる。子ども同士ではまだ上手く遊べなくても、人形があれば遊べるのである。

最近では、家庭の中で、お母さんが弟や妹のお世話をしている姿を見ることが少なくなっている。誰かが赤ちゃんなどに接している姿を見た経験が全く無ければ、お人形を前にしても、どう扱ったらよいかかわからないであろう。そのような場合は、人形をまずお母さんがお世話してあげる姿を見せることも必要である。

まずは人形を「抱っこ」して、包み込んであげることが大切である。親はどういう形で子どもを包み込んでいるのかを知ること、子どもは、自分も包み込まれて育っているのだと思える機会を持つことが、第一7年期には非常に重要なのである。

## 3. 研究の方法と内容

(1) 活動や検討をする対象学生：保育学科2年生7名(卒業研究領域の中で、心理学を選択した学生)

### (2) 手仕事の実践

欧米の考え方である4つのH(Heart、Head、Hand、Health)を重視した子育て・保育の実践として「手仕事」をとらえ、学生が体験

する。具体的には、一人一人が一体の人形を、ヴァルドルフ



図3 ヴァルドルフ人形(筆者制作)

人形(図2)をモデルに羊毛を用いて制作する。

### (3) 見学・体験実習

A県B市のシュタイナー幼稚園において、見学・体験実習を行う。見学・体験実習日：20XX年Y月Z日10時～13時

(倫理的配慮のため、時期や場所の特定がなされない表現とする。)

### (4) 子育て支援実践現場での体験活動

学内にある子育て支援研究センターで行っている子育て支援活動の親子の集いの場に、学生それぞれが手作りした人形を持って参加する。そして、参加親子に人形を触ってもらったり、人形を用いて一緒に遊んだり、感想を聞いたりする。

## 4. 結果

### (1) 手仕事の実践

週1回の卒業研究の時間に制作を行った。自然素材としての羊毛の手触りを味わいながら、出来上がった人形をイメージして取り組んだ。



図4 人形制作の過程と出来上がり

## 手仕事の実践についての感想

手作りした人形には、作り手の愛情がこもると思う。親が子どもに手作り人形を与えることができれば、子どもには親の愛情が伝わり、人形を大切に作る心が育つのではないだろうか。人形を大切に扱える子どもは、周りの人にも優しく接することができるようになるのではないかなと思う。

腕の中に収まるサイズ感や柔らかくあたたかい素材で出来ているお人形が、まるで自分の子どものように、愛おしさを感じた。自分自身が作っていく過程の中で、だんだん人形の完成した姿が見えてきて、愛着も徐々に強くなっていった。

素朴な人形ではあるが、いつの間にか、自分自身に似た人形になった。人形を通して、自分の心の中を表現できるのではないかと感じる。

親の手作りの人形は、子どもにとって、世界にたった一つしかない、自分だけの人形である。人形と同じように自分や他者にも、「かけがえない存在」という感覚を持つことにつながるのではないかなと思う。

人形を手作りすることは大変な作業だが、「産みの苦しみ」と、「産み出した喜び・出会えた喜び」の大きさも知ることができた。

## (2) 見学・体験実習

## —シュタイナー幼稚園について—

年齢縦割りで、知育をしない。子どもはまだお母さんのお腹の中にいるような気分で生きているので、部屋も子宮の中を思わせる淡いサーモンピンクのペンキで塗り、透き通ったカーテンで直射日光をさえぎり、夢の中のような雰囲気を保つ。子どもはこの時期は理屈ではなく、模倣から物事を身につけて成長するので、静かで、優しく、生き生きしたよい人間関係とリズムのある生活と良い環境を与える。この年齢の子どもの生活半径は家庭にあるので、幼稚園も家庭的な雰囲気をつくって教師はお母さんやお父さんのような雰囲気子どもに接する。教師は子どもの「模倣」のお手本となり、子どもの「遊び」に意味のある刺激をあたえるために、家事や手仕事のような豊かな活動を取り入れている。



図5 シュタイナー幼稚園の環境、活動の様子

## 見学・体験実習の感想

機械やプラスチックではなく、自然から作られ、温かみのある玩具の良さと、子どもが想像力を働かせ、ごっこ遊びや劇を楽しむ姿が印象に残っている。環境構成の中でも、自然や温かみを感じることが多くあり、その中で育まれていく保育者と子どもの愛着形成や信頼関係も優しさに包まれたものだと感じた。

ライゲンという時間では、シュタイナー教育独自の歌に合わせて、体を動かしたり、歌からイメージを膨らませて、体を動かしたりして、心やからだのスッキリとした気分になった。

自然のおもちゃや自然素材で作った素朴な人形や編み物等で遊ぶことは、おもちゃの世界観やイメージが完成されていないため、自由にどんなものでも見立てることが出来るので、創造力や発想力が豊かになることがわかった。



人形も手作りで気持ちがこもっており、いろんな表情を思い浮かべることができた。自分たちの作る人形とも重ね、愛着がわいた。

電気を付けずに優しい色の毛布や布を使い部屋に飾って雰囲気作りをし、刺激の少ない環境を心がけているのだとわかった。

### (3) 子育て支援実践現場での体験活動

 <p>お人形さんに“よしよし”する男児</p>	 <p>お人形を介して親子と学生のコミュニケーションも弾む</p>
 <p>お人形を通して空想を広げてお話ししてくれる女児</p>	 <p>お人形のイメージから、ごっこ遊びにも発展</p>
 <p>弾力のある羊毛の感触にお母さんも興味を持ってくださる</p>	 <p>お母さんと、作り方についても話が広がる</p>

図6 子育て支援活動場面での親子との触れ合い

#### 子育て支援実践現場での体験活動の感想

手作り人形を子どもに見せると、日頃からおままごとをよくしている子どもは、おままごとの食べ物を切って、人形に食べさせるなど、すぐに遊びを展開させた。人形がすぐに「お友達」になったようだった。

人見知りの子どものも、人形を前にすることで、不安そうな表情が和らいだ。言葉を多く必要としなくても、人形を介することで自然にかかわり合いが生まれた。

自分たちが持っていった手作り人形たちと、子育て支援施設内にあるぬいぐるみなどを集めて並べてごっこ遊びを繰り広げる子どももいて、自分が想像しているよりも、子どもの直観的な発想力は大きいのだと感じた。

年齢、性別、性格など様々な子どもたちの人形へのかかわりを見て、子どもたち一人一人に応じた人形を作ってあげたいと思った。それぞれの子どもが「自分人形」を持てるとよいと感じた。

お母さんたちは、人形の作り方に興味を示された。作ること自体に夢中になると、気持ちが落ち着いたり、ストレスが緩和されたりした体験を伝えた。

お母さんが人形を抱っこすると、少しやきもちをやく雰囲気になった子どももいた。一人っ子でこうした変化がなかなか見られないということで、子どもの感情の表出の様子に興味深く感じられたお母さんもおられた。

## 5. 考察

シュタイナー幼稚園での生活の中には、「感覚的に豊かな」活動が多くある(図5)。日々の仕事がごく「自然に」営まれていく、つまり、「行為」と「意味」の関連が明らかである時、子どもの「生活環境」は「学習の場」としても豊かな刺激に満ちているものになる。

本研究において、学生たちは手仕事によって、その「行為」自体に心の浄化や満足感、充実感を見い出すと共に、作り出した人形に、自分の分身としての存在感も見い出すことができていた(図4)。出来上がっている物ではなく、作り出していく過程そのものの意味にも気づくことができたことが、感想にも表れていた。

また、シュタイナー幼稚園での見学・体験実習では、日々の生活の軸として、子どもたち自身が布やシンプルな道具、自然素材からイメージを膨らませては思い思いの世界を作り出し、遊びを展開させており、それ自体に浄化や満足感、充実感がみなぎっていることを学生たちは感じ取ることができていた。「感覚的に豊かな仕事」が自発的



な創造行為を促していき、「世界」に意味を与えていく、そして、このような繰り返しの体験によって、子どもは自分自身の内発的な意志に基づいて活動していく力を培っていく。こうしたことを、自分たち自身の手仕事としての人形作りや、見学・体験実習を通して学ぶことができたと思われる。

学内の子育て支援実践現場において、手作りした人形を持っていき、参加親子と触れ合った体験(図6)では、学生自身の「人見知り」的な感情、子ども側、お母さんたち側の「人見知り」的な感情の部分も、人形が介在することで緩和され、非言語的なコミュニケーションの可能性の広がりにも目を向けることができたことが、感想からも読み取れた。2-(2)-5)で整理して示したように、ヴァルドルフ人形はもう一人の「ぼく」、もう一人の「わたし」となる。連れている「ぼく・わたし(=人形)」は、自分と同じ人間であり、最初に見えるお友達なのである。人形のお友達を大事にすることで、そのお友達をはさんでつくった人間関係から、人間対人間の交友関係ができてくる、という考え方を、学生たちは体感することができたのではないだろうか。

こうして、保育者を志す学生にとっても、自らの感覚を駆使して、体験的に学ぶことは必須と思われる。理論だけでなく、自分自身が「感覚」で得ることができるからこそ、子どもたちの感覚器官の育ちへも、目を向けることができるだろう。

シュタイナーによれば、子どもは大人を模倣することによって、いろいろな行動やふるまいなどを覚えるばかりでなく、それは子どもの意識の奥深くにまでいき、子どもたちの消化の過程や内臓の機能の発達にまで影響を及ぼすという。模倣する段階にいる子どもは、環境の全てを吸収する。そしてそれは、子どもの意識のずっと奥深くにある、意志を起こさせる原動力の一部となる。

情報が氾濫し、人々が時間に追われ、乳幼児期の子どもたちの周辺でも、コンピューターをはじめとするあらゆる電子機器などの刺激があふれている。しかし、だからこそ、保育者を目指す学生たちが、子どもにとって、まずどのような環境がふさわしいのか、自分自身できちんと考える力を備えてほしい。人間の発達に合わせて、まずゆっくりと器を作り、子どもの意志でその器を満たし

ていく教育の重要性を理解し、保育者としての役割を果たすことができるようお願い、これからの養成につなげていきたい。

## 6. 今後の課題

子どもの内面の成長・発達に主軸を置き、「年齢に合わせて、瞬間瞬間にふさわしい環境を準備する」ということのできる保育者が実践現場には必要である。さらに、一人一人の子どもの深い内面を丁寧に着目していくことの重要性を、保護者と共有できる力も保育者には欠かせない。

保育者養成に携わる立場としては、今後も創意工夫をしながら、目の前の学生たちの学びや体験が豊かに積み重なっていくよう、努力を重ねていかなければならないと考えている。

## まとめ

子どもたちは、自分を取り巻いている環境を、全感覚を通して体内に吸収していくということを踏まえ、現代の環境から幼い子どもたちを守り、真似をしてもよいモデルを用意することを第一義に掲げて教育を実践するシュタイナー幼児教育に注目した。

子どもは大人を模倣することによって、いろいろな行動やふるまいなどを覚えるばかりでなく、それは子どもの意識の奥深くにまでいき、子どもたちの消化の過程や内臓の機能の発達にまで影響を及ぼす。

子どもの内面の成長・発達に主軸を置き、子どもの状態に合わせて、ふさわしい環境を準備することのできる保育者の育成のため、手仕事の実践としての人形作り、シュタイナー幼稚園での見学・実習、子育て支援の現場での親子との触れ合いなど、様々な体験的学習を取り入れた。こうした体験的学習の結果、学生たちは、子どもの育ちのための環境の重要性や、手作りの人形の活用の意義などについて、認識を深めることができた。

謝辞

本研究に際しまして、学生たちが、A県B市のシュタイナー幼稚園にて貴重な見学・体験実習をさせていただきました。園長先生をはじめとする諸先生方、そして園児の皆さんには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

### 参考文献

[1] Barbara J.Patterson & Pamela Bradley, 渡辺まり子訳, 虹の彼方からきた子どもたち,

学陽書房, 2004年10月

[2] ヘルムート・フォン・キューゲルゲン, ヴォルフガング・ザスマンスハウゼン, シュタイナー幼稚園について, シュタイナー幼児教育協会, 2020年5月

[3] 堀内節子, 0歳から7歳までのシュタイナー教育, 学研, 2000年11月

[4] Rahima Baldwin, 合原弘子訳, 赤ちゃんからのシュタイナー教育, 学陽書房, 2001年10月

[5] 鳥山雅代, シュタイナー教育入門, インプレスR & D POD出版サービス, 2020年11月